

# フランス廃兵院に思う 幅広い軍事史研究を

京都偕行会  
奥村 友一 陸自63

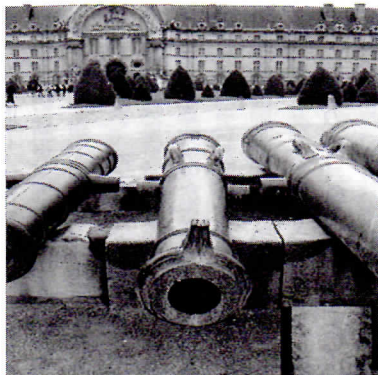
京都偕行会は、今年京都霊山護國神社で小規模ながら慰霊祭を開催した。隊友会が主催する殉職者慰霊祭にも参加する等、再建の一步を踏み出している。最近、退官後初めて海外ツアーに家内と参加し、ナポレオンの墓があるフランス廃兵院を訪れた。

墓の手前に軍事博物館があり、入館したところ、古代からの武器や鎧などが数多く展示されていた。中でもナポレオンに関する展示は充実しており、



フランス人の誇りを感じた。廃兵院（アンバリッド）は、ルイ14世時代に建てられた旧軍病院である。古代13世紀頃から第2次世界大戦までの武器などのコレクションを展示して

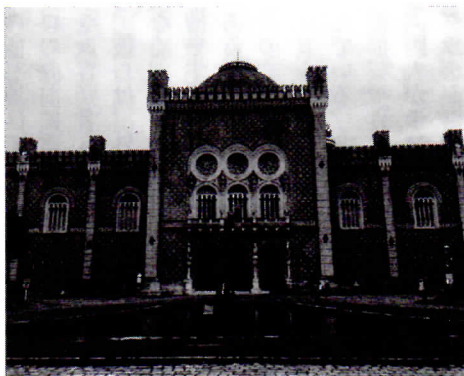
おり、軍事博物館としては、世界最大である。希少なコレクシオンも多く、国王が使用した軍装品や装飾武器、フランス以外の世界の様々な武器や世界大戦時代の貴重な映像もみられる。中庭には、幕末の下関戦争で分捕られた長州藩の大砲が展示されている。



その後、オーストリアのウィーンにある軍事史博物館を訪れた。こちらもオーストリア帝国の栄光を感じさせる展示が多く、ナチス時代の展示や第1次世界大戦のきっかけとなったサラエボ事件の自動車なども展示されていた。一番感心したのは、地元の小学生が歴史教育の一環として見学に来てい

たことである。自国の戦争の歴史を偏向することなく学んでいる姿は、感心するばかりだった。

ウィーン軍事博物館は、町の南にあるベルヴェデーレ宮殿の南にある。元々皇帝ヨーゼフ1世時代に建造された兵器庫で、現在17世紀の30年戦争から第2次世界大戦までのオーストリアが参加した全ての戦争に関する資料を展示している。



ヨーロッパ各地には、同じような戦争博物館や武器博物館などがあるが、それに比して日本の現状はどうだろうか。

靖國神社や各地の城や古戦場跡、自衛隊駐屯地に資料館的なものはあるが、いずれも限定的であり、靖國神社も明治以降のものしか展示されていない。

い。日本における古代からの軍事史に関する博物館のようなものが必要であると思う。偕行社が独自で設立することが無理であれば、国家事業として設立すべきだと考える。

ただ、なかなか博物館の建築は難しいかもしれない。しかし、建物は難しくても、図書や研究は可能だと思ふ。かつて幹部学校記事に掲載された金子常規氏陸士49の『兵器と戦術の日本史』などの優れた研究もあった。

偕行社に近現代史だけでなく、古代からの軍事史研究会のようなものを設立して、各地偕行会を通じて各地の城郭や軍事史に関する資料を収集・整理・分析し、軍事史として出版、紹介することは可能だと思ふ。資料の収集分析については、防衛研究所、幹部学校、各職種学校等の研究部にも協力を求めていけば、現役世代の会員増加に繋がると思われる。

日本の歴史教育において、正しい軍事史は取り上げられず、ドラマや書籍によって誤りを含んだものが伝えられているのではないかと危惧している。

外国の軍事博物館を見学して、軍事史に関する正しい歴史を伝えていく重要性を痛感した。そのためには、まず貴重な資料や史跡、軍事装備品などが散逸、消滅しないうちに収集する必要があると感した。